

## 〈青森県史〉の窓

2

一八九一（明治二十四）年九月一日、日本鉄道（現JR東北本線）が上野・青森間に開通した。開業当時の青森駅は新町通りではな

く、一つ海側の安方通りに面し、安方駅と呼ばれていた。当初は小さな駅舎と僅かなホームしかなく、寂しいところだった。

ところが、鉄道開通後、流通が盛んになるにつ

### 青森駅前の今昔

中園 裕

（文化振興課県史編さんグループ）



93

STATION STREET AOMORI

青森市 青森駅 駅前通り



- ① 大正中期から昭和初期の青森駅前（県史編さんグループ所蔵）。  
② 青森駅前の近影。2004（平成16）年8月10日、森山潤子撮影。

れ、安方駅では手狭となり、駅舎を拡張するため、一つ南側の新町通りに駅を新設することにいった。写真①は新設された青森駅から、新町通りを見たものである。この写真を見ると、当時の駅前は非常にのどかだ。まだ青函連絡船も就航してまもないころである。明治末期から大正期にかけて、青森市でもっとも栄えてい

たのは、大町通りと浜町通りだった（いずれも現在の本町）。新町通りではない。これには青森の海岸に秘密がある。港ができる前の青森は砂浜を中心とした海岸が広がるだけで、唯一の交易場所は、浜町棧橋（現在の浜町埠頭付近）だけだった。そのため棧橋に近い海岸の浜町通りと、その裏の大町通りが、青森最大の繁華街になったのである。

ところが青森駅ができ、青函連絡船が就航（一九〇八年）してから、青森市の流通は駅と港が中心となる。鉄道と連絡船が、流通の太いパイプとなったのである。けれども水深の浅い青森市の海岸には、連絡船が着岸できなかった。そのため青森市民を中心に、県を挙げて大規模な港を求める運動が高まった。その結果、政府は一九一五（大正四）年に青森築港を許可する。

一九二四年八月、青森築港が完成すると、青森駅は名実ともに本州・北海道の玄関口として、交通・交易

の拠点となった。これに伴い新町通りは、繁華街を形成するようになる。昭和戦前・戦中期には、松木屋や菊屋、青森デパートなどの総合デパートが競い合い、県都青森の繁栄を象徴する場所となった。

なお、写真①の右側に見える博品館は土産物屋である。青森駅に乗り降りする客が必ず立ち寄った場所だった。その後ろには旅館青森館がある。現在、ホテルニュー青森館となっているところだ。

写真②を見ると、この付近はアウガのビルが目立っている。アウガは若者向けのファッションビルだが、土産物も売っている。伝統が受け継がれているように興味深い。

青森駅や青森港については、『青森県史資料編近現代』の第2巻から第4巻を参照されたい。